赤穂編年録
へ13
2927
3

井上頼圀
伊勢物語

門へ13
2927
3

昭和九年
七月廿日
購求

まつ山こゆ　海の庫

うらなみ　たつき　そこの庇鱗を庇

なみ　考　書　ふ　ゆべ

ろ　ぬ　ぬむ　男女の情愛あり

ろ　愛　の物

みちを行く。儒者の文辞あり。
三輪の無菴の聖堂。言語もまの名を問ふて。
ちと衣を着せて禁じて堂塔伽藍の名を
を聞き給ふ。中堂さまの尊び神社をく
ちと新たにあすを衣抜きて入来をして。
賤しの筆をわくふ。問をる魚の味を食べば。

新を知ふ。さまば業事を
あまきまば。ちのめとしるも此のすべて。
作者国東野ふて。色の名ある所以
ちちを言辞を聞をして。
に後ふ。ちちの人物。名書よ
瀬ふ。弱冠の。神社とあまて。

くるくるの根なるべし。猿が人真似をして。名人の聲をまねる

唐子の仲好

牧亭主人誌

遠世
まと金ロ三

万葉
清之助

上州桐生
福富屋
万左衛門
覚
於滋
白羽根町の

福見屋
米次郎

櫻吉
伊勢熊

閑情末摘花第三編巻之上

東都　松亭金水編次

第十三回

きゝ入る白羽根町の表側。こゝるまの庫鋪ゑ。福見屋と
ゑ暖簾をうみ。侍幾ゑ屋先う。黒板屋ゑ黒漆の塗び
ゞーも麦ゑふて。見樹の松の華くゑ。翠草くさゆる屋敷の色
桐のずんどゑ。ゑ枝拵。石垣筋ゑ清く苔も。教代つゝ
りのぞゝいゝるゝどゑ。ゝるきその花び。根府川乃敷石城

さ作ひて松の内(ゆき)。豆茶(じょうだい)の節(ぶし)を肴あげ米(べい)大分(だいぶ)
殺(ころ)ぎ悪(わる)くなつさノウ。彩紙(さいし)や腐(ふ)むきやが長(なが)く蛤(はまぐり)
寅て。アノ汁(しる)城掛(かけ)て出(だ)して紙(かみ)ハイく松(まつ)蛤(はまぐり)がよう
ぐのますう来(き)て板(いた)サ。ひきを清(きよ)さあが肴(さかな)の皿(さら)のサ
覚(かく)仕(し)蛤(はまぐり)とつの出(だ)ア。稚(ちい)く切紙(きりがみ)があるヨ。自己(じこ)んぞの板(いた)も
蕎麦(そば)でゑ〜ねくそふ蛤(はまぐり)の酒(さけ)を呑(のん)ん。怨(えん)
元(げん)ぎ出(だ)ア〜〜〜 紙(かみ)ヲやあ丸(まる)旦(だん)さあご。ホン三(さん)君(きん)も
ごうで頂(ちょう)蛤(はまぐり)をおあげヤ〜ふのでどざいます。代(だい)乃(の)も長(なが)

さあが熟(つぐ)と出(だ)仕(し)ますのサ。何(どう)卒(ぞ)米(べい)も。よく板(いた)を蒙(ゆる)さく
あげ(ぶ)さいのつぶ。板(いた)も丁度(ちょうど)紙(かみ)のハあのもので用(ようい)ヨ
先頃(まえ)彼(あれ)の方(ほう)ふ心(こころ)あり(ぶ)でもあるを。ら月(がつ)さるも
色(いろ)さつけ。ぶ。も何(どう)板(いた)〜〜。モシ色(いろ)あるとりへべ。陸(ろく)分
貴(たか)ッても生(い)るのふと出(だ)仕(し)ます〜〜〜。旦那(だんな)さあよく御(お)用
つけ。さいます〜〜。あ〜〜。板(いた)女(おんな)衆(しゅう)や。まさ嫌(げんき)女(おんな)業(ぎょう)でも
ふ〜〜さ者(ものし)ヤア往(いき)ますうまのけどご其(その)心(こころ)がのの
でもるのけどご。何(なに)も今(いま)まで接合(せつごう)のあるとりへのふヤア

な。白髪定面ざ〳〵。まアよく彦一会て見れば〳〵じゃア
分らぬ〳〵 弁 丈夫〳〵 行のうでござります。ちやく 弁 旅ハ
お物〳〵をすつて出掛合を拵べすが宜じやアござりませうか
米 お旅サ 彦一会て見ようと思出一の最中ふ。伯
母〳〵 廓ハ曇〳〵と曇れぬ人の数すると 米 次第ハ耳 弁
引うて 米 ゑんざ。大分強〳〵しい 弁 お旅さま。ドレ明て参り
ませうト 弁 紙一ぢ 絶もなく。強 廓 りて 弁 ア
 四郎さま大変でござります 米 何ざる 弁 何 旅

あさのう 弁 イエ〳〵アノ 桐生の四郎さまが。滅ふお可毒しの
お娘さまを成お連なすつて入きつさんでござります 米 エヤ
桐生の叔父さんが 弁 ハイたし〳〵 丈ふ遠ひ ぎへます
米 お旅 。ゑるゑど丈アキヤア大変ざ今時分何しふ出
うきつんトのひまづ〳〵 廓 の方へ遠〳〵出て 弁 米 次第
叔父福屋万右衛つか上列 桐生 術 の 滅
ゑきべ。この家よりハ一倍も強り〳〵 豪家 の四郎様 娘
お滋とのゑん。今年十七の 表へのとう

自分のの。好きふまるーと花太郎ふ。今日は腰元の義太郎
父が後ふ浜ひて。徐〜と来る奥のぱ。米次郎へ入るよりも
米「こまへ叔父さんとくお出ぎまーこさぞ出る中がお待ちう
ぐざいまーこちらへ。サアくまア此方へ方「お待ち申しもあいか。
義母へ何故ぐエ。お病も癒〜べらばごろへめつきうと待く
まつさ〜米「お叔ぐぐざいまチョン雑や早くお火鉢を拭て来る
雑「ハイくこまサ長松どん。お客へお供の方へお茶を出して長
ヨッサアくお初どんもお初どんもそ拭ふきうくお拭さる

斗りをアそ居ちやア雑ヨの。早くと大でも起して。お茶でも
入る准備をーふやアるーるのいぜマアそ和の汁線や何うを
生方へさづけヨッくこまサ年末ふ。ろく和をつみ長松どん。
汁線を嗅で苦めめヨそーそ汁がこうう何武れ人ぢう
ちやアれ人ト言ぐろ多へ何ふつけ。心配もこうー米「コウ
雑や。ろ濱来や。自己が子舎の菓子箪笥をおく来る。
そーてお茶を早く仕拭ぜ方「何サそ拭ふ搏ひるさんる。
他人のおゞやアる。今日へ義母へ何刃へ出ろうう方「ハイ

寺参りの外に出て出まーす。モウ今ふ帰りますせう。方「左様。
そこ迄でこまい私の娘ゴヨ。為て荘土を見学とのふ新ひぐ
サテ女の出るのハどうも長手ごうーー。マアくと延して来ざ今
回ハ見非連て来れ人けでやア。まるれ人ふ解ふまつこう。
去の泥棒で出うけこのサ来へ(エリ)ゴ。お滋さんでぐこ
ますす子。去て嘲来して居ますすけど。まいのものごうーまぐ
お貝ふかアます。ト挟拶すと。私ー。乳ふ「ハイお初
ホト去さだろう迄ふ何ーにのうち。慈さ人かー。殺ふむのこ

方「まぐ一向ふ出ーぐーー。形ハ大きくッても孩児で仕れ人のサ。
見ーー。近く色人ふ仕ェで世ハれ人けっぱアまーー。れ人来「ーー
娘の児ハ何でも内猫ガ面ぐこのます方「色人ものごまーま
さけ親や兄弟ふ若男を見ーー。別非蓋ふ方ガ湯ーも
知とれ人ーートうち筆ふ。その一云ガ米次郎の狗ふキックリ
を世ガこ紙。ぐまーー。その色者をいうふすぐーと猿狸。
いこぐ稼ーーされば世間ふ。ーふ遠ーーて。門ーけーーを
こまとするも私若きめうべー。れ人ーー帰る妙乃お松。ふの

はるひきや
人の
今ぞ

累物ヲ。ガー。殘キ。ル「ヨヤマアラの。手ノ。防分ヲ。何。拭シテ。お出
ますつさ。ヨヤラの。濡ハ。お。濕デ。ごぎいます。エ。大きる。紙。如。呼ヲ。
ますつさノウ。丁。度。ば。方の。老。世ト。ひみて「。叔母さん。ガ。お。立ち。
さぞ。お。驚。びざらうの。ヲ。寿。命と。云て。後。方の。ものゝ。ごヤます。
私と。。。

ホ「ヲヤ、とやアまア お止るきれが直どがいますまそんど弁
羅ホ織ますまする 方「上列も近て功者ふまつて。能仕すまのけ
米「ち板サ。この緒編ゑんざア。九で糸織ごトのやうちお独ごキ
らひまて。近るこの仕出ア。拵ま殺三種ピ種吸おこもとり
拵ハイ お独ハと拵て来ま。お独ハ鬱て結縄け。に取吸ゆ
横蓋。そをくホ蓋ま。ゆ蓋ハ出せば方ゑつ父ま。お拵ゆハ
さ面ぐの出ーホ拵を鬱ーつ。国素鬱ーき組ま。ま。
あるぐうち解て。その日も蓋ホ取ま。万ゑ鬱つハ七八分の

蝉を数ーて出方を見り 方「さそお友個ホチット嘲ーぶある。
るホハ出ぐまるハ世の一件ぐ。先頃中ゑ〜信怪ーそも
ヤレ蛇の蓋蝉のと近ーホる。ハテ合点の仕ねハのと大ゑ例の
陸ぐ出会ハ出のハ取ぐの物のと。更で物遅ーまるし
ア蓋物ハ大抵ホ。男ホまの拵ゆ。性ま板て蔵ま出せそるく
と。ま。て取る出ぐやア板人ア。色ホまやア仕細もあらうと。ホハ
白ーホを出ーて。近ホで板ホ。ま世ハ表撫乃
晩ホ逆電ーて今ホ仕方ア。ま。ま世ハ表撫乃

要用。ゆ抜して人をゝ方へ参るもの。きっと来
ゆうことなしでも出方で出発ざ。を親が他人嫁の縁組
夫でおさまるべきの親。サテ親類の中で人をゝ抜も他人
年寄達世話。私が抜ふ世の人と組来ゝも。悪ふいよりも
私が他人の嫁。嫁も嫁くるゝ。そこで世話。
人をゝ。重縁ふ。て孫の代まで。親ゝ親ゝ。
嫁ゝの子まで。悪像て抜ざ。他ふ。
悔ふ。私「イヤ。その子で私が。お抜ふ。

まず人をゝ。沢ゞ。善さ年齢ふ。娘の兄他
ひを。抜ふ。の。出来ゝ。高嶺ゞ。
の春。来ゝ。方へ。すゞ。百と。教四ゝて。
教のゞ。人て。長ふ。ゝ秋ゞ。ゝのと。他ゝ。仕
大出来。夫も。百ゞ。町ゝ。世ゞ。抜ふ。
抜ゝ。ゝ。志する人。人。桂土の。抜ふ。
生。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

加減ハ云ても遠う。遠ク千里と遠人の為ノ。遠ハ知ル
易く。定めて遠く遠く風俗ガ。知ラるヲハ遠ひヲ。私も相生ガハ
ヲ不ガ
伯乗と。ハ本の指を折きゝ。貴人ハ遠入ト家の石城ガ不
遠ク在ル遠のハ遠で。他ハ後指をさゝるガ。既遠の忘念ガ下
若ヲ遠きうつる叔父の教。遠ハ死ハ為ケと。今ゝ遠ゝ不云遠べるハ
遠遠の為ノと思ハのゝ。遠ハ遠ハ不信て。
遠ハ遠ハ何もヲ為ケ

第十四

末三九上ノ九

尚下末次郎ハ発ヲ食入で米ハイサムムでらぶのまヲ私私
ハ伯ゝまるとハ沢ガ多のゝ。遠母ガ大遠私城様で
居ヲまヲれど。今ハ往方人ハ遠ハ沢ハ方ガ多いとハいハの。
まゝ様ハ熊夫私ハも往ヲまヲ。ハ方を探して尚
人ハ足通り遠ハ。坊主ハでも。ハ方ハ遠ハ沢を仕ハのハ
ざと。ヲ尚ハ海の。ハ山ハ遠ハ。ハ人十人ハ方を探ヲ
居ヲまヲ 私ハ。ハ米ガ十ヲ。私ハ。ハ遠ガ遠ハ。
他ハ遠ハ私ガと。ハ遠ハ遠ハ。ハ遠ハ人

ぬ〻。坊主ふしぎ法衣の。尼寺へでも出るが宜しのサ。婚礼の盃
をせう。親と聟とが約束さうなサ。天下晴ての主流の文掃良
人を拾ひる身のうで男狂ひの客丈さ。彼の處女思ふとの次の
遠ふとの人るを。たく〻云はせ。嚴しく世ありアるぬ所を。
焼まり可愛ぐるる。可憐處女ふ恋者つけ。何まも新〻私
ら寄ふまで。私をかせ迷惑させ〻。けれる馬鹿くいる人ト
お私をおろうと聞ふ。捜する云ふの場時ぐ〻ある人ども
遠近考る人とひ。殊丈月と年あの心ふ情るかとふあ〻

と云へべそ〻伏軟云。辞を酒くーー発ふ彩と。以感むこべ万
なつの心解ーや覚ふと発ひ「ままく丈へ武千去ても汚人
海〻ふいるまで〻。まう丈で宜ってそふ一つの相法ありサ。
則ふふ彩るお滝のるふ。今までも法方〻。彩ふ呉也ノ
来ふふ呉のとうる丈人ど云て来夢。ままく迷くもふいると丈
うりけりふ仕て来ふ。今四遠彩いふ彩ふるつてるると。彩ど
嫁へ物拾ひくる。長拾紙人〻世界ふあるーど。お祝ーて元
世ふ角〻。縁も彩くふる左ひ。板人ふるつて先代米ひ父を

祝ふと。嬉しく会ふこと不可思議。春のうるはしき
月日ごとに、なく来次第に高潮を探せ最中。方角
拵ッて居ればとつくに来不来も忘れ。まつ的事も関ては
嬉を連て出て来るのもまた世の味。人二の次で。実に御法を
来次第に。妻合こそ至の安楽と。丈でつぎく来中。
的拵ご意地を拵すると。宜しやアあいつと呼ひもはらの縁
を拵へるみけど早速に。老形の四参もなしぐく。孫不来はら
心配に。孫き給もあるまじ。兵治に呆れて。叔父が拵
の。拵治て居ると。姫のお松のことをあく〳〵やがてすま〳〵と
うち笑ひ。「まさかホンニお松の風〳〵ばかりみ
〳〵縁結だろうに。他のまと遠ひまして女に勿論男と
て。一せに一回のと。まかよゥく得心のうへでなけれどまう〳〵ね
ると。撰の威光でもれを怖に。押てもうるい拵づくの
〳〵の嘆〳〵と遠ッて。仕方を縁者の仲人に。
いまさら。まつ拵よいけれど。まに今の今日拵て。
来も何とやすう紛れど。ごうが手拵も。なんと

あののう、知をぬこけとまもいませんぢ。「コレ」義母。そもそもア
化人ぢく一番りの。接拶ちのふのの。妹様の気へ。
わへぢ。私ぢ娘へ約束も。不約。私ぢ心次第。親の手紙で
配してやる。良人を取ざの。意ちの。法をいう娘しゐア
どうやせんトいよとちお方ふ。嫁る。ちうみの。笑ちぢ。何れ。
漢ふ不配せちうと。何れ娘を世ちって。ちうと。親乃手
紙でするを。を。や。角いへの。ふの不埒。その相談。ちを出で
来わへちうしやア親の様い勧まうわへふ。ちを。何様え

義母ちう婚さあぢ。紅心ぢ。朱次第どんの。高を。女房不
相ちいるのうエ。分海。同舎の不をそめ。どうで。毎日化粧
無を。清業すく。寄。唄女ぢの。遊女の。ちうふうきうと。
業ふやア。紅わへ。ちう。操。紅ハ水ふうる。水面のあで
ぢく。ふ。歴あぢ。ちう。紅ちうるらうサ。たと人。ちらうぢ。頼ちうぢ。
紅ちして。連て。ちうう。ふやア。私ぢ。ちを。ちを。ちを。ちを。
私のう人の。私。乃。奥サ。ノ。色。絆。をして。せ人。ちを。世ぢ。娘。未。
意ふ。ふ。叔父の。横威でち。何。ちんと。ちうんみ。ちを。ちを。ちを。

次郎へ聞くあつて来へ「佐分叔父さんの名師と云ふ事でい
ぶかいませんが。国ッとる中へ出る。或人が世話をして。納菜を
売
老ませんが。七八分拵まーーーー。文を今さーー多沢へ五へ拵
ゐーーぬ。たと納菜を拵つても。拵ゐの拵ゐうーー。うーーりへ
ーーーとと云へやア。佐分丈でとてからられるまてきしゐのやーー
きれへどうせう。もうーーのうって来へさうでもどうへま
せうが。男のいーーきーーませうと。名を何を今さーーゐれ丈
万へゐーーぬとりへゐーーその世張人へ私があつてひへらうぺーー拵の

造作もゐのゐ。その世張へ拵の人ぐ工所ゐ名ゐを二家。
ゐきつけて越ーーゐせへト他まで可ゐ叔父ゐ強造実へホーーの
高もうゐき高ゐ迎ゐのゐゐれば。名ゐを流ゐいゐも。伸ゐ木
さ、張りて発解ホ工城ゐひ拵らせば勘も倒ゐうさゐぐ木
泡を副て拵ゐ木ゐ。拵造のうへ挨拶せん。まーーく今春へ久
ーゐ。拵拵ゐーて荒ホやゐ木徳ゐ恐ゐゐへと徳ーッ。会ゐ成
動めて万ゐ出ッ。現ホ城ゐうゐの作造へ拵ませゐ拵へ
家ホ来次郎を。武方へ拵ぎて来ゐ北へ拵アホを

とまり
あまもれ
たぎ
ちりて
ぐる

世界の人類は同じ食べものを食べて
まんざらすてたものでもない。米「ハイ。まず拾ひ物でもしやう
いろいろ。ちやアとのかくもこの通りやアとをちさんのところへきたさ
くんわたくしのうわどうろうさんがこの通りやの通りそこへとうとうとまつてゐる
ちづひあるめんうつ。さちせを手くやく。わたくしのぶつくらくん日本アア
ところのもの。わたくしがこの通りやうちやうちやうちイをそこへまつてゐる
うのようまつ不まつこのでわたくしはあるまいか。米「ナニさう
ですもあのようちやあるいてかとめとやうとのさいらんだ

とうちの不てうかさう。あんといれたてるしうとうあるのい米「支らて
おまへ。そこへぶんらんどやアわうのうのかたまつてさぞらかるこの
あのきもちそうまく。ちんどうとうかさうしがまくつちやアをうし
あのいまあいつ。あもしろ。ここやアをちづのきうけが、きそ入わへ
うつ。えんといつてもえんとうきへまいる。米「支あしどうのちつふ
えいらをきいが。あえまきどつふ俗えしとおがあるのえ
米「イヤ。おふさうえもきまくツてナニ。私一個できるめる
米「支しやてあえどうすいきさどうらんとやらもづうとや

[illegible]アヤ中ゝ丁ダさるのゼ米「夫ざうゝきそ子ぞの女絶米
しゝとものでゝとどかわやぢつごころ只ぞころゝ。ぞろとゝ
ぢきぞんさせるのサ。そこ[illegible]やァきと私のこうもあるまそうゝ
丈ゝゝいゝゞゞゞゝとゝゝゝ

かくて殿上人おほとべ。一方の米次郎殿をよ封ひさとべ
その中そく半給米しる板の脇新ふ舎人。ひとりをよ
びき
脇米ととりきりふ言るわ。実に未法節の高慢一
れど弱て止びきふもあ〜れべ。仮徳伯五次ゞ教義の
右助ふ人の。年齢ふ人我も酒〜ふんべ。殊ふ抄会と
ゐどよく心ふるものゐとべ。ゞ見を情まんと米法節ハ
右助ふ抄〜のうを消。遠敵ふ新ふ会長ふと
ふ人。右助も米表ふ時ふ〜。ひ人次ゞ世法ふる

ゑれ
月抜のゐふ言ふもそれわべふ生ふ会やゞく米法節ゞ
以きふ新ふ。万ふつふ対面ふ。私ゞ脇のお客ふの見て
米次郎と情答ふふ。遠回表向脇ふゐ手ゞ〜ふれ法
中国
脇ふり抜め知ふ。そのと法の女児也。脇ふ遠ふんふふ
ゐふ。右抜ふりふ人ふ方の脇ハ飛ふゐて遠或
いふ人新ふそのと法の女児ハ。ゐふ人ふ方ふ法節
えどよ
遠回抜ふてゐふれべ。法節ふいふ。ふ方の脇を抜
われべ。私ゞ一分もふべ。まふ脇も一ふの分ふ抱ふる

本山谷平

まれば。物といへれても手後の縁組へさせまさと考へ
ゐけとど其次第と云合しるるの場の樹合迄川
ゐ〜べ云うみれど方をつもすと法度の。作く林木茶和
せべたと情合ゐる中もしう。史いと互の揺毒の表ゐれく
拔云の紀めゐけとべ凶伝の暴。はゐ人血場の巡北東
中。れれいさせれとゐ人ゐどふとの後ゐまく狩ゐるく
果〜ゐくとそ及ゐふけ

未摘花三編巻之上終

倉本平

本山谷平

閑情未摘花第三編巻之中

東都　松亭金水編次

第十五回

ゐ
ゐす　てふ。ごゐ名へまゐれゐふけり。人ゐとべこそおのひ
初〜ゐ。史ゐ〜ゐく不来次第い心ふおのお里ゐるすをまゐ
教云不情合といえせ。叔父ゐ方ゐるお流ゐ縁法。ひらん
云ゐ色ゐる。発ふ角影〜ゐ縁色合て。頼ゐへるくたゐ
ゐ分ゐ。されべ双方鳥りと。動へ安〜ゐ人の接ゐとゐて

その日の夜助も帰り。万右衛門も漸くと奥の休憩へ入りたれば。
先刻よりの事ひを。蔭で皆居合お源が。何ふ
聞へんもうもく。父が私をえらうもつと一度平伏して
言へ。此方まるまる〳〵来ないの方が。我千百万とまをせん。
私はまと頼ふ。叔母さん私のとおなじ。拾てあるゆと思ふさ
う〳〵。迫前の友達まあそをしくふ。帰るまで待て来まーしふ。
今さら先で強いなとこと云て。奥へ逃〳〵れば。何の抜〳〵
百ぐらへませうト迫き女児の心ふへ。消も入る気業を。

又ふつけても万右衛門。拘ハ強剛者。強るの拘ハ。国来
喧嘩の気分ふく。世間を吹てきを。人〳〵居り万へコレサ お源
何も手抜ふ力を堅まるれ〳〵いるた。人何抜るゆ万百
らうと。此方ハ親抜先ハ他人親抜ゆ不義ふ。何私
うでも世ハせ人を強くして居ゆ百を世ゆるまぐ
抜くと云変ゆもあるけど。有分ふと私云へを方の
為事私ハと。拘国ふて居ゆ。若揚て何ゆ万あと
強まり私居る女子の奴ゆ。我ゆも法も知ら人者ふ。死

せる私も出るつもり。彩三郎さひとりもこと招ぐ。孫不同舎い
ちのんちぐきでり知者知己出入のものや皆公人(も)みそもく不拝者して
めでとそーの儀別を異ッてうーみやアひりーもさと云て
今きーゆりいされど。彩が祝でもこの宅の。拝ふ去れ人けい
るもアゆされ人いふ乗ふ濃ふぐ何と祝ふ「私者種くと
考へて居ますが。たとえおあ板が祝おの。威光をもって拝外て
先を祝待ふさせきーても。不詮私いこの宅ふ居ふるれい出来
ません。何故ふこの不料心の情こと手る来さんふ居ぐーれ。拝ふ

する叔母さんの。乗ふ入るいで来居待。どうせ納まりいらて
ません。だ拝ーて元ぐ私のうへふ不拝私を頼ゆうみのの。どうぞ
丈ようの私の祝ひふ一ッぐらいます。丈を作りてたいきいと
いふ不方ふ出つ兵ぐて方へるるとと丈アやアいふ。良人とひ
拝ますふ。出て祝ーふ不拝ふるを知り縁も迫ぬ人ゲ願
ひとりふの人何拝いふ祝ぐ。祝のるてもぐさいません。人ふ来
ど
国も云ます居りで国会へ人何ーぐだ。ふ居ーもるいと云て
ふると驚ッの走所もます。云て後ます。後食ーの尼ちれ

私の母様の上の御方のお妾様でおいでなつて。居る所と
申すを聞いて居ますと。一ツ屋の義助さんの義母
と申ひます。一ツ屋の家業父さんの。息才で長寿をなさる者ゆえ
一ツ屋の家の繁昌その三ツを併さるべく朝夕祈願を勤として
居ます。そこで良人を相撲仲間の心づかひをするよりも
遠方嫁さに乳飲子。どうぞ私の空とも早くれ離いて
父ぶつきりと思切る女児が羽を。ぬさいとぶしく。
思ひぞ深き涙を拭て。四舎育の馬鹿俳優の女児の

乳のその子。別ケ〳〵。居ますやうに。居ますやうに。
そ私の馬鹿を云ひ人で。自己が直ぐ仕て来るの故。
乳を永く待て居る。児の母様の。
楽しむる人ト児を抱て親が仕ひ空とも
心程ホロと華き作成をするなべ。

作者曰 万太郎つへ教て悪人といふ子あり。老を世ゲ拾ホい
米次郎 姉子の切屋ざる不孝者ど思だろうの心ハ
不孝者。で叔父の威不強で。女児を米屋不法て

要令せんとするの一條に老人の癖にして。我慢の子所
為。世間多の如きの老人間にあり。然れども弱冠もまた
我慢あり。然るに不熟の基とする。孝信義當然乃
理をもるるに。この惑ひ多し。急に我慢に名を
毀ひ人將に惜るべきなり
ゝ不乘海乃川傳の宗のとなるべし。大師の平間寺の
かを是除弘法大師の灵験殊に新にして者物乃信の男
如この例に尚を運び偽作の前後を

未三ノ中ノ五

撰りんと欲するの。年中月毎に抑この大師の溺を
病ふ。弘法に憑まで。世界の名人宣傳とこそ。
延寿二十二年に唐土へいり。手授相承して他の無る野
山を開きあつり。ゆくて宣傳まの云家伝法の密法を遍歴
して十二家のうち。教列授の教に。一在宥乃家に
宗りけるに家に三の女児あり宣傳に暴して且手
は流とのべ。宣傳に出家受戒の人ありて教てその心に浸
つぶ。如児にまずく長に集ひ。命をうけていれ者の如に宣傳

やうど遂ぜして。今唐人の来朝ありて。我国へ来りて。
如何に大きに驚びて。その夜の夢を語りども。海へそれ
ようして家の内を見まわすに。農業のみをなれば。
拝ありけり。正面のものと。家の内に掛りて。雪の
間ふもとの像を。かの拝ふ刻みて。横の内へ押いたく。
安ふもを抜そう。かくるもの。横で。横も深く。
髪あみ化粧して。空海が国へ帰びやき。
あらべして。横の内ふい麦搗拝ふ刻みる像のこかもハ。

未三ノ九中ノ六

像のるふ果ふ果しふ。忽地位のかくふ。彼拝ふ
刻みる空海の像を抱きて。手ふれともるく迷ひ出く。
矢にの波の濁る水ふ。身を投て死ふり。夫より年経て
漁人の。網ふうみて引あげしふ。蛙殻多くふ。
中ぶ本ふて。平間寺を建ふ。かの呪の書捨を
ふ
ふ。一と漁人の。伝る呪ふ。唱ふ。夫ふ初ふ。伝の
如洗りふ。校ふ十二の災厄を。除さ。ちふ。
ふ月ふ。ふ表月の決一日の。ふ表れ。彼天竺の命日を

糸瘤の手紙 者日ようかをのーとなんど見へ給へ。
ぐき打ち給へ。春秋のおくりあーしべ。でハ御笑ひ
ようとの大師を信心して。月毎の廿一日ハ必ず斎を運ぶなり。
今日も朝まだきより立出て。本願寺ハ糸瘤。高山ハ新
しう。門徒の[illegible]井出の去福のおちうを。心づくし雑
ゝ長ゝ義矢と打てハ薄の中へ。ハ部倉ハ豆の孔を。ぬけ
大ハ痛くなれば。まづその傷の本坊へ立よう。茶あど打く
傷をなれど痛ハ頭ハ止もせべ。ねてあべきるまあ〜縁。

手紙を立出て。波〜をさそう大衆へさーかくるハ。その日豆の
きりぶきくて。ちや哺ハ。ハ男ハ。ハ不至〜ようう。
ハ不学んと。を迎をなれど。生腸腸ハ。ハ
ちをてもの。の痛ハ自在を。ざれば。ハを拾ひて。ハとう。
測て。ハるどハ。ハの。ハの。ハ方ある。駿河の立て。ハの
う。茶ハ。ハの。ハの。ハ十八丁の。ハ。ハ。ハ。
あり。ハ。ハ。ハ

痛め。こらず海の家まで。漁りて暫くと。ねらんあと
思へども漁師などの仕業多く。常かたへきる法もなけれど。
心を定めて歩まで。月頃日頃の信心不足の利益
あらば後の来へまぎまろう。猪猴の業を捨てる
仏道。彩りの心を信心の徳もあらわと思ら暁して
心細くもて抜。後の来へとさーかるふと来れの相弧くと
思ふて。仏門廣を至ー。岸辺の波の耳を聴うーて。いと
殊勝のずるへ馬死拝場とおもわきて。凄きる浪
宵時あとべて一筋の。先き人見え来る。逃ふ光る
沖の漁火も。波ふ揺もて或ひへ波も。遥ふ岸ある拍の
数へ。打規城清ある。久治へ見浪の刃ある。頭
も不狗のうち強ぎて。お波城見久也ど。水花柳の拍
竹ぞふ見え移べ今へ頭り果て。イーーぐまさ見ひ入。
一心不乱不動至大師遍照金剛と。文殊唱へ六所
来ふりかべ来へ人生へ今ぶーと。漕く心の易くかえて。
其の痛ともうち忘れ。行そのあ文を揚て遍照金剛を

ちゃ〳〵ッと。嗚呼あのひもよ〳〵。後へよりかへモシく
ト呼びけるを。なのハぎさらと振返て眼を丸めくるく
まんまるきぐら〳〵表きの宴あるか。よく後き姿を表し
ハ〳〵ちゃんとおかへ。この人ハ女へハイ私ハお為ッかを
お決ッ。ちゃうでございます。何ぶんどうも気味の悪い孤
狸の所為ッかとやッ水入クトちゃ。狐つあて居りけり

第十六回

高下女へ迫く進む女モシ〳〵張金人へ何拵ッ

中存ぶ〳〵何年教えてきの人ハ〳〵張金ヱ。お為異ま
ゐを決ッ女ざまの。式処〳〵ハまゝ十二三里ッ。彼方向て
早くと逃ッ。ト云ッ。一云ッ。拵て。乳味悪ッ。ハ向も。
式方へ来ぬ。ッ。呼ッ。女モシく私ハ何も。ッ。妖怪ッ。
ぶ〳〵ハ。チット沢ッ。て張金人。ッ。と思ッ。
毛を。ッ。毛を出ッ。出発の。ッ。一人途へ。ッ。
さハ〳〵。ッ。絶ッ怖くッ。ッ。
ッく。ッ。ハ。ッ。ッ。ッ。ッ。

私の風体は浪の上源氏が養へて一度も歩いた事はない。
けれども。そこは流石に。まくへあるまへと。書物量は大きく遠ひて
二三里もあると。云へて。歩行力が抜けて歩けません。何処の
お方ぞ。どんどきません。何卒帝のお使で今晩一夜を
願ります。旅宿でもあるまいに。お連なつてきました。
なるほど。この渓の長い。この渓の長い。この渓の久しい
この廉如。まこの人の。ある。我知りて。大きな。奥地。狗を抱て
久しぶりで。実に私は。汗を流して。まだ。狗が。吠える。何故

まこの人の。ある。我知りて。大きな。奥地。狗を抱て

なるほど。この渓の長い。この渓の久しい。この渓の長を。
痛て。思ひの。お。遠くまつて。どうせ。宅。まで。後ら。
私は。川へ。ある。精。実。お。も。一。呼。お。泊って。翌。宿場。
便。を。特。で。乗。て。行。ある。ば。ぐ。宿。屋。
どうして。宿。舎。まで。行。る。のの。変。全。体。私。は。田。舎。の。で。在
土。へ。来。た。人。今。男。初。て。嬉。て。呼。ー。小。ま。す。お。宿。
宿。舎。へ。泊。お。近。へ。来。る。人。は。日。頃。ま。ち。ま。を。待。

そんな事ばかりあるまいと。イヤまい実ハ此の世界。途へ歩て行
その人ハ後ゆ。うべその人ゞ今。張合ハイヤそれゞ者いく
ばかり実切まハ切ぶらうものひまするゝ。時々淋しく
なるも嫌ハ。ちまで来んでこざいます。実ハ先刻者
人ハ如ゞと思つて馬鹿ハ。咽を吹んでこざいます。チ〳〵
おあまそれを形をしそ。きうり張合ハどうハ仕ようぞこの
ものゞう。厭さまわるのゞ〳〵。女へ方板でこざいますゝ。時い
人ゞゝ。実でもアおあ板の世ゝ。涙切ゝ方ハ方ハ月ハ
かつてこのハ。ゆまも焼酎でこざいます。久〳〵こちら先へ仕ゝ
ゝ世人ハ板ぶらう。私ハ一心ハ大阪ゝ長ゞ。命ハうゞ
ちまで来ゝア。女へ私ハ四合三月でこざいます。
手紙ハ。ハおのゝまんけれど連ハ。乃ハ方ゞ。張ハ心細く
ゝまゝ。ショト。嘲ーゝ。ハ先ハ。ゝ方ハ。ハ
石川の寅ハ。ハ久張ハ。ハ恵の家をゝ。ハ
張合のゝ。ハ方ハ。ドーハ。ハ張ハ。ハ
湯ハ入り合ハ。ハ十ゝ久張ハ。ハ振ハ。ハ長を。ハ
おあハまア。ハ板ハ。ハ仕ハ。ハ久ハ。ハ久ハ。ハ
合の。ハ板ハ。ハ仕ハ。ハ女へ。ハ

久八ハテサ隠すまへ様へかな。私うち楽しるのか尼寺へ縁切と
ゆわれ屋でもあるめへ。夫ゆへ縁金不出男ゆゑ。ゆゑ〳〵久
でもあるめへ。何様もう〳〵れへ。ママアもう〳〵縁切らしゆこ
文ちゃ二年〳〵様ゆまけどやアぐのまゆ。何様ちゃぶる
女「おゆ〳〵久へ十三年〳〵どやアれへ夫ゆ実不出のゆ。仮初めも新して
連ゆ来ゆ。一例ふちの家へ何つてゆると何事と云くも
私のかくて会ゆ。夫ゆゑ〳〵出ゆるアたゆ。ゆ知して居
れへどやアゆ〳〵れへ子まゆ達てその分解ゆりそまゆぐ。心

ゆ
ゆ不ゆうとも夫ゆへ。その様ゆ様ゆ宿の亭主不意て。この
ゆ様ゆ様ゆ様ゆ様ゆ。何も自己の連と
ゆ様ゆ様ゆ様ゆ様ゆ様ゆ様ゆ。
ゆ様ゆ様ゆ様ゆ様ゆ様ゆ様

りわど。女へ文をかき〳〵子。沢を中すすもう〳〵。他不世してかはる
さいますすきヨ〳〵〳〵。他不ゆのの。すこそ〳〵ものゆ
辰も去れ人のの。ザラく影〳〵て。皮せう女へ私へかげとのひ
きし〳〵。全体相生の去でございますが。今四番父と同伴不
在たの親者人番〳〵て。そ所の見の物不ある物りの
知を。ひ物る回会去ざ〳〵。元人不番う〳〵もすすのをかや
父ごゆ物ふ。つみ申うとうすう〳〵。迎もあの孫を行弟
ようこと。未物後かさまりの去ますすへと云て回会乃

方へ若たの親者人塩不ひとのひ鶴〳〵〳〵。今さ〳〵屋ら
出へ世び。とうど私を尼不〳〵てひさのと云まして。も番父へ後
ませび。文で今日番方不書は遊をして。一人独出さのどご
ざいますナトのも涙〳〵私〳〵さ不来を変ひつ口の内で。
よく出とれ知もあり。久浜へ物浦ゆ〳〵久八ア黒ゆる。
良人の郷を切をとつて尼寺へ独のへ寄ゆる。孫が法
ご〳〵れ人とこて。尼寺へ独のへ形〳〵。ち〳〵文不遠ひうく〳〵
何も今雪りの年で。世を持るまあ者〳〵れ人ゆ。こ〳〵ひ

初さお方より。他の刀孫はと尋ねるのコーや居ーいよ利
居ら。云四せめ　孝「イエ私ぢやアどざいません沒ます内去でござ
いますそれど。今まで童さるのかな。男ひ初の浦ういのく
そそ抜る海苔らーいるちやアあります。　久「まるーべ抜のるサ。
世男不男ハ沢ふぐ。殊不お者の擦抜を抜てサア嫁外うと
云て人る世人黄ひ人ハ海ひどあーア。初いよ自己姫ぢ分の
方でおらうと世人久び恋ふ女房ふする私ゴア　孝「ヒ嘸だうう
久「イエ呼ぢれ人子吏るーマア女房ふーて居ろと云てくる。虎

実ろ　孝「ホ〜〜　久「ナニホ〜〜ぢやアねくつる。物び無ぢ外れくとつて
頂ます〜ぢ。まろく居ふるるかハ止て。自己ぢ吳ふつまふぜ人
孝「そーて物抜いよすのでどざいますす　久「エ初いよすのサ
孝「アアレ私ーやアふ。物抜ぢう見ぢ痛いくとあのれまーう
ふ抜ふ見ぢでさます〜ョ　久「見ふるーべふを出すと抜るぢ。ドレ
出てあげかう　孝「アサ実つのちやアるでどざいます　久「実でよ
安つるくッちやア抜ハるーるのアサ　まる静とて居ます
孝「ヲホく探ぢつ〜ふぞーて手ふ私ぢやアどざいません　とのの

アレサス「コリヤ、伴の者を出すぜお前を実つゐて安の今の
しゃアねえ。どうせ駄めへ笠痛いく我慢をして居るくッ
ちゃ仕ねえ。その代り張ッぱアの板木強るる者を有人。孝「夫
でも阪まりぶ不強ス「十二お前の夫婦の中で不強も物の人のの。
まアを出さぶ不居ヨ孝「ヲヤお前のさんと夫婦じゃどざい
ません。ス「お前かた板ざらうぶ。角四れその私ぶ。孝「そんなるを
お云ふまつて。返でお国ふさのませう。ス「ハ、笠とも解るの
孝「アレ痛いヲヤ水ぶ出ます。ス「ソンどうぶ痛ぶ止さ。直

心地不あつたらう。ホン二杯人強不ちくありまーこのこうこう
ス「万々とのあり丹。年乙外科伴不ちーぶ。長男不性笑こ
男を長人不するお前。強強強強孝「ホン二杯板で
ぶどいます。伴幸今四の世お前。擦殺を強ちく性笑てまて。
お前の板の者ふ実のある。紫用ふ人を飲人不ちーませう
ス「お前も見ふ不細お前板人孔伴あのんぶ今四の世孔板
んぶ強不ぶりも者を擦して。サアくミウ痛やせう。アヤレく
今日ハ表不ふく美外さ孝「どうーその皆を痛ふちつさ

うゝでございます。ゴーンと五番ぐーゝを撞でありまする
久へナラく勿体ない罰があるゝ　「ソレ出張ふさの夫探ごろの
ぞといつてあるいて。再罰があるとおゝぎやアあいつ夫でもう
おあの板の虚空へ切こをります。久へ夫ぎやアおあ正さへ
ホ。私と夫婦ホるつてゝまる私ろ　「おあ板おゝぎやアござい
ます。久へそう板ホ見せぶり斗りゝんゝぎやアれ人アアレく
ひ牲が消さつて。ゝる涙撞ゝておる　「アイヲ殘ホ絶ろの
牲心ごチョクゝゝ。ゝるやア牲手せんト売竹を消して

まの時ホるる　「ごまぞ吸でつみて世ひまもうう　「モ夢
のゝゝ牲次いるめ人間狂私の利さひ牲ごザアおあもお春
ト隠き仆房ホ兵二人牲ホ悼うる人もゝ。殺ホひ徒ホ熟
ぶ。交湯奥ゝホ金の妻。たゝ人金仏石地新本で逆さ雨愛
でも。唯へあるゝ今宵の果粉殘人ゝろゝ〜〜春　みゝかへて
そのゝ殺も明まるゝ。の嘶き沢海の殺の。るさゝ子ゝる私
まゝ。二人へ起てゝあるをうひ。地海ゝて立海徒ゝ殺
おのまへまホぐホとひ容ホ。神さのの兄ゝゝえ

ほど。相生の者と成うすでまで。鶴の名もいそぶ。荘子の鶴
の。物知の流といふるもの。いそるのでアまぶ。位ある。物の形
物なる所の者。安児六者と本人ぶ。今きゝ迷てる仕業い
ちい。縛ゞ出来ゝ〜。山本さと元。物ぶ。ものいうと。穏をすえ。
まゞ張筋。唐を。ちらぶ出さぶ。お涙も。今ゝ。恋人。ひべき。ちんゝ
アとと。ちんゝ。どんゝ。ゐ元の人。ぶ。ゝ〜。ぶ。ゝ〜。知〜。ほど。男ぶ。ぶ。
紀ぶ。実の。ふ。ふ。ぶ。どうぞ。ぶ。拾て。ゐ。ぶ。ものと。知。ぶ。ものは
ぶ。ぶ。ぶ。

山□谷正本

蔑ろにいと哀れ。ゆゑ仏に成せて来世を乗り越ぐ。
冷方もあらんと思ひ。其日より不止めけり
あだし人が流が浮い尼ホ子んと決しるを見た人涙と歩りを
ひとすぢの海苔ホ子ホ子ホ子

和を厭人の心うゝ。悪くる汲りのひとゝ。細と出て
あるとれが紀念ゝ時年。まゞ累さ人も盛り丈はゞ。の数の
八重ざうゝ。咲も揚へぬ身を抜く。幣平の髮を薙ゝ。心の
底のおゝしゝ。あるもあゝれ此恋の羈さゝ。ゆゞ不来ぬ布
袋子の心を恨むのゝ。ゝ。ゝ。

さて今日も暮れて。翌とあらんもゆかたまいぞうしとうと寝ード
らも疲れも眠らぬ分三日目。追人のものへ入り来て。松ヶ岳まで
出れど。捜てきたべこいんかう。お松は果もとく云ふもう。
こを出て万吉ぶ。狗へ裏き渾身も疲てひふせまーと思
ひぶ。彩ふ万吉も未以弟。坊子のものが乳陸みて駅長の浮城
ちのへ出。義理も法も無ナ人ぬ不実ようしたのみあれば。女児
一個を出しと勢う。彼奴等ものまき聞ーせて。後医せんと思
案をする一万ハトキ三蓋物も未次弟も何とかいう新ふ入送去

ふへこの通り。婿不振り出姫不情まれ。今ーー実も後ら出ば
実敵ふよを捨て係舎人ものき尼ふ入ふ尼ふ出てあこられど
追人を出れば逃ものこいん。ミテ日出べ迫ッてこころで万渕川へ
引でも投こう。但しん馬乗ものふ捕まれて。男ひの外秘義
でも。ーて暮るるみろてもも参ーべ。トいふてかーーの面もおへのふ
迷子を出でも出ひ少人ものもふしーもも抜ーて捜ーて抜ーて不参の
取骨を拾て探すも及ぶねんぶ。扱ふ不抜て眠ーーを出ー
ゆーぶ姫のお里ふこようして情合のあるのくふ姫不実ふも

百ぜ。今回改めて右助ゝ。私ゝ女児不幸ひうはそして
此方の縁不仕ゝ。れ拙きれば不存る女児を一個打捨い
新不備ける一個の女児私もそれ都て安決サア其改帯や
ア右助とそわく縁不出て下せ。その条を答てまく不行を
分ゝ。夫ぞいまさか方の沢不入ねへ初ゝ見へぜ三ツ不
一ツへ私がいふるも。少て其八ものゝ者ゝれへとも不今夫世
下もゝ。ぜそそ右助を恨ひくゝ易きゝるれど
その後へお星の宿るもきれぞ万一縁対ゝ。異ゝめとゝ

うち私ゝ。れば発もかくもまづお星が宿るをき。渠さ
那私のるゝ。ば仔細ありとゝ。夫ゝくゝ不思議を立
ぬ。漢傷丁へと気ぎ。が打ゝ冬の月其ゝ故ぬまゝ不
暗くゝ。その方角さ人宿ゝ殊不生ぜ一四ゝ
ゝもゝ人ば。彼方ゝ細ゝ。もゝ単衣の捻
ゝとゝれど此ゝ。明庵の。ゝ犬の新ゝ不ゝ
ば。弱ゝ。ば人ゝ沢ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ず。ゝて。狗ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

ゐ人と呼び、ごぞうも暗くって分らゐ人、万二千内ゞ遠ゥてくゝ知
らんとゆゝて又者向ゥ、ちゝそばゆくとくゝ風に蓋まゝうり
米次郎ハ近寄て米モシくゝ演藤丁うまゝ「演藤十、モウ
一所先へ行て。在へ曲ゥさ知でごぞの米マア乃ぢ者ゐ人アイ
ゝやアトこゝゐ〳〵ゆくさまゝふ者きゐ死在へ曲をゞ知例ハ形ゥ
拓木ゥ生垣ゥ。こゝさゐハ者と又ゝ垣のゝゝゥゐ稲ゝと
塔婆の所ゐ梅の屋根。ゝゝ者ゝ凄きふゝくゝ風のまゐく
ゆゐゥゐ梅のゝの殘ぐゥゐゞ〳〵米次郎いゝ呆ゝゝ

狐ゥ惚わふ。騙されゝのハテ不測と想心ゐうち先ゞ。引久
さんとゝゐ。わゝしもゆのゝ生垣ゐ分を高ゥゐて。ゝゝ男を用ゐゝ
見つけ。ゝを逃んゝゝ者出ゞ。仮男ハ是早ゐ。ゝ我ゝゝと
ゝゐ景勢ゐ異ゐ奴と心ゐ点ゝ米「モシくゝちと物を形ゥゝゝ
ぐゝゐます。いゝれて男いふゥ男ハイ私ゝゐ者ごゝいます。
米「大変ゝゝ知ゥハゝゥ子。先行ゥゝ長ね米ゝゝどゥゐ物とゝくゝて
ゐ男ゥきる男「ゝれ私ゝ山知ゥハ知ゝゐゐ者ゐ。何町
行ゐの横町でごゝます。米「ハア成ゞゥ六ゝ不来ゝ。モシ

お里と云て門子不出る女児を。知りて居まする人男へ三十歳く
考ゞ。扨ゝ米沢市ハ男の傍へつゝくと揺動せ米「そゝも時
こゝ分ら初へゞ。おあい清之助さんゞやナれ人久あゞ滅不申ゞし
ゞもし遠ゝ出兎角人ハ思れて仕方ハ悔ゝ更ゞ考あい
米さんゝ私も先くゝよく伝さおゞと実ハ恰ゝく思ゝて長ゝ
ゝ。おあきんゝ月不かゝつちゃゞ。仕不面同仕方も初へ恋れを勝へ
奴と。恨んでお在るゞらうが。何ゞもゝ関係ゞ。どうゞゝん
思ゝ。かゝんゝ米さい米さ三ゝ不ゝ不りゞゝのゝ。ゝゝする

未三月下八

仕方人もゝのゝ。義母ハ女ゞみで。何ゞとゝ不ゝとゝ初人長藤
ゞゝ。私ゞ特ゝ体力を云て色のゝ。ゝ何知不
どゝゝて居ゝ。さて仕人もあゝ。さゞ関ゝゞらゝと。実不
幸ゞ方人月へゝゝゝゞ。丈でも多く息才で居ゝて宜ゝ
幸世の二ゝ不居ゝの久「お拝米へ何知ゞゝを知ゝ家也
云拝に限り。明ゝ地不彩ともも考心をおゝて米沢市ゞ清
さんゝ考も乳の弱い全体私の方へ内証で実ハ遠般さゝ所不
居ゝと。知ゝゝゞも長ゝゝゞ。今ゝゝで彩ゝも色ゞ変ゝゝ

貢の仕振り。何振り箇振り沢をつけて仕義れど。何をいふまで
一向考位のといふもんざい。拾方がれ人やアなやア何ざる年さう
形ざこアく何ふーろお方の居るみさる更同体不性う「ば振」云て
お呉るさると此〜ぜるよろ脇徒脇突不表倘ぶ表へ〜米「アナ
今文不敬て。昔も恐いも〜れ人いるナア先人云て仕るョコンサ清
さん。何をそう振ふのぎくして居るンざるみとるまき壺共ぶ身をどう
ろさせるの人清「イエどうして。全体今方まさ〜清って婆ぶらく〜も
何振り任せうと云ま〜こけれど文ぶ振ぶく海れ人〜。手振ぶるの人

できぶ未れ人と云て居ます。のサ米「文ぶ〜質ぶやアれ人。アア何ぶ人
この任ぶト延引ぶ〜ぶ清く助へ酒見を吸き清「て
表倘ぶ不甲斐ぶ。て不熟蔵て居ぶだうで。ぶおさん不方貧不
かり今の振ふ云ぶて居ると。表ふもいぶれぶ表とも云ぶび実へ
沉呻ふ隠ります米「トいふいまく何振りと沢ぶ。表倘ぶやア一向
見ぶ〜れ人清「義ぶ〜接ふ形云ちゃア。ふ沢りぶさ〜ぶれ人義ぶ。
まア隠ぶの人ぶけを少て太呉ぶさん実へ表個して出ぶ表へどうで
配ぶ表世間の義理ぶ。死人で仕まふと見恨して。出へ出ぶ

その中に病ひにかゝり人間も絶へ〜。まう〜泥町の亀屋人往て
その日の暮るを待て居て。死に出さ塔芝の郷図らぬ人の来て
おて。分を作ろう〜始終。まり方里の家に居。教授する娘ひ
で一銭の大笑もうげきに沉む。個ど慈況ゑれば乞ひ長
〜さつ〜さ。ちを世ど形の及ぶ〜〜〜

いそぎまづ母天さまのふこ持ちとれ人処どころ。始ふ仏細のあるべき。
もうく死なも別るるも及ばれ人夫は恒ぐ去世ぐ子処。夫ありい
嫁し潔せさ移りも。彼女ぐ心夫紙と引ふ。どうも有仏紙ぐ
人の空ともえやく付てえ寄り清夫ぐ引いてきせ〜ネ光
ふえて付ぐ〜。清之助人ぐ送り清へ夫おさんぐ名乗れるさん門
ぐ付ぐ不出るお里とつの女児の宅ぐと仏師ぐ今日まで世話家て
居るもお里と云て母子の事。門ネ不出る女児左一そもぐ人あり
きそきのうどういん命の代弟うのて来八〜その仏人紙寄と今

どうも思ひもつぬ不測ふてものとひて所を去きけり

第十八回

ちらぐきふやぐて消ふく世代の子うきき世ものこけるうちぐ
捨迷集の員外小義ふとう。意世ハ若男のその中ハ民
人の心を汲ふて。うそうふ云うきく孫ども。その身の出世と
きくうふ人夫を止めんうもく。寄り男さハ人心最初ハ
水性でお物の。さう人死ぬとも別世とハせでと寄り安やうその
家の。今の奥若を悪びう孫。月ごう日ひの思やしの。主と長

とや入婿の世話する人のあるを、べつそうへまき処へ捨てんとて、
心の底の落胆さへいかの不公平かうけとても。早速この男が
在世ふびんるも嫌き良人の参稼。まづ時とく帰宅せし。
生しその涙で八。逆様と見損を抱いて。をどけ世の名残
うとぞ。なのべいと唄うて。涙のうるおめる心も細き魂の
時き大乱はうきの元。で一命をいとの内来世後不幸つるこの
家のあ個お星母子へ孔心ふうく不幸果て。一息ちりと太
息をつぐおのの母の果敢なきことも不孝の報の浮。それを

うち眼まんと拾うて部屋あがり。お星ぐ五郎のうしろ姿ある
刺刀をうち出し。脱ぶ死んとしうしろ呼ぶて独云ひとりそ
あうう平日行。武士で死んだ。お星さんや義母の後ろ姿。
今まで持くと涙切ふ世話ふ五郎。伯
母と尼妙みて天狗の抱して死女の母全一つ。変ふ
送出ふのであうう夫でよ。彼の影のうしろ姿ふいつその
ちふ天川へ。夫ぐりく独云武刺刀を元の天結び。後
出門の思ふ心と酒あぐり。日そうぐ。涙の時ぐ。

御あのお里甲斐さま「ヲヤ奥さんせさんでやアるいろ。何郎へお出でと
思ふも為、ぶしなせやう順り。やはりあるてちせ「ヲアるあ後ろ丸
こゝでトのびり拵拵出ん。とするを。無い奥せず鈴木聖へて何の
ものあ〜宮仕が狂う清さん六前者の久。ア〜家人お出ヨ。
土産楽仕て来ます。さて〜何ぶう異変れ人。お貴そ出さるも
あくッて。何で清さんと唱唄でも義やアるいのアマ人。の色の
実人ぬりト抑ぬられた拾方の。俱ふなせびり蛇撥さて。お里い

を世ぶ彩せるそ。さ「ヲて奥の何祇り人。七て清さんい何の契
お出ぶ。何でも私が異変ぶと思ひさ。の実ぶうるあ私をど
奥ぶ母「天うさ私どもが音の中ふ彩して張ぶ。れの毒ぶろ。
何。ろりの知ろ〜のあろうぶ。ぶるもまうすあり。中もあ奥を
人のあ〜。いお世話ろうるいでも。まろ拵ぶ品ろあろ色
とあるいろ。変て元を撥
ぶるおろいろて海まりるるるる撥ふおもひるいろのふ。ちあ撥
撥て。ポン二番もるいるあ「ヲるヤ長安のいふり遠ひるい

のサ。私ども百姓ハ仕事ハ
お撫てゑの。入り家もコレ位見ちたことも知ませ。酒屋を
して居る宅ゑのこと。世ハ
ハ。ハ。ハ。
世ハ。ハ。ハ。
成利ハ。ハ。ハ。

さすの限りぞと。あの人も亦拾乃助うゝお里が用をあくの足つゞかぬる対ゝ様さま「コリヤ何とお里さんお義さんを世ようゝこの赤ん坊と不当表を世へたらゝ兵をあげ「アレそれハ拒んとするを。お里ハとゝ〜せびり地の浦〜寺へ行て斬り切。續下〜〜物ゝ〜〜何ごとゝ清さんハ婿不仕と出て出さう〜。私ハ死ぐ仕きハ中〜今まで〜ハ稼くお世話不うてありがとう。礼をゝ〜〜今の身ぶん給方が良ゝ〜〜捨置しゝて。れうトこやアキヲ何れも。えゝぶ立何ごと私ハ一向ゝ〜良ゝまを世さんハ何れも不仕ぶ。泣

良ゝで分てお安せるゝ。然母何れゝ〜〜ぶ〜〜「お拙サ角ゝ。今ハ良ゝ〜〜〜

未三ノ下十四

世話人とやーの処へ行てお話申し上げて教へて出てきやうとナニ
私ゞ此板の形ぞ。何処へ縁付きるのゝ。狗のうちぐやア死ぬ積りか
見届を拵こそ。まこと後で何板しようと素ぐもうまこそ。
万一清さんゞ密夫を沒不未まへのものでもあらうと長い中で一す
一番うき遠しく出て死ぬ。個不お用不かつぞ。又死不挨ぬこと
のでございますト張終を結ぶべ表個い狗りさ「ヨヤまア清
さんも何板しんぐらう後不何出楽ぐ。おあもまこ狗べ板板
たたたたたたとふく。アイと云て出しくそるるもまぐやアるいまこ

こを夫不しても死ぬ不ア及べるるへこ。清さんゞ金手板ぬ不安安姿
ま〜。此方もそう残りでこを〜ア〜ら〜とら〜ア不板ゞ宅ぐアるへう。
ア表姿ぞ。ア人ア形へ何板でも今且形をもらうとうこ表おるま
人縁分ともいふとにて教牛もあぐらうれ人清さんる日本不
似合ふの男ひの外情へ人ざれ人。き板ぬ人不情を立て死ぬつゞ
ホンノ狗死とやーぐいる庶くしへ下お里今きこ清ぐ勝ゞ。何
出を除こまこ世ぞ。力をつけるその云ぞ。母へ侍ぞそつくぐこ
母板板ぐゞノお里。表似へ何板も合表ゞ仕ぬとやよヨ分清

人の気へぞの強くて変るものざ。清さん不就ちやア実へあるまいが。何でも見事ア何様ところの思入があざらう。パテ何ふしろ困つたものさそんる心一を出とでも変ぶ初と及えべうまづ仕様もあるけれど。然しそ清さんが出て何さのハ先刻のうえ一ぐ日ぶ変ると間もなくサ世ハテ子をもとやアぶを不ホウ嫌さる気出人もあり何故ア義母おのキアぶうのハ張ぶのうと大思ひぶ世ハ二衆儀の幼ぶ遠ようハちゃ〜うえぶ。悪く すると ア国ウさもんぶ〜ハうさと何様する ア ゆく云てお安せおれ。

末三八下千六

何様も気不ふるう〜世へおぶハ義へう〜ぶんでも様子を人ぶ形とうハとさハ交不ふるぶ自己の安ハ不お年と考ぶぶと
するう〜乃遠ハうもあるやアまと中るうもあるのサ実
ぶやア清さんハ考ハ不婿ホ物のぶやアありまチまハう世ぶ
もこと〜のうハぶぶやアさと一れ様であるまいとお思ひのう
ぶんふ〜きさ何様し〜んぶ〜ろうまと出を俗不清さ思ぶ
多と業ト他面体ハ十人ハて年代奴廃女のおまハ三人様と
尺合さんく考ぶ何もふきれう〜門ハ義様とハあるうと

おどろきあり給て さて ヲヤ清さん何の処へおいでゴザル 成ホ人ホモアル
ゼンを お探せゴザル 婆ハ 母「ホンニモウ千清 婆 婆もいく分 不案内ゴザル
雑説 不案せさんゴザル 大変を仕出ス 人 知ゴザハ子 清 十二千清知ゴザル アル
ホ人 私も実ハ不 張ゴザル 母 ハ 母 ハ 母 ハ

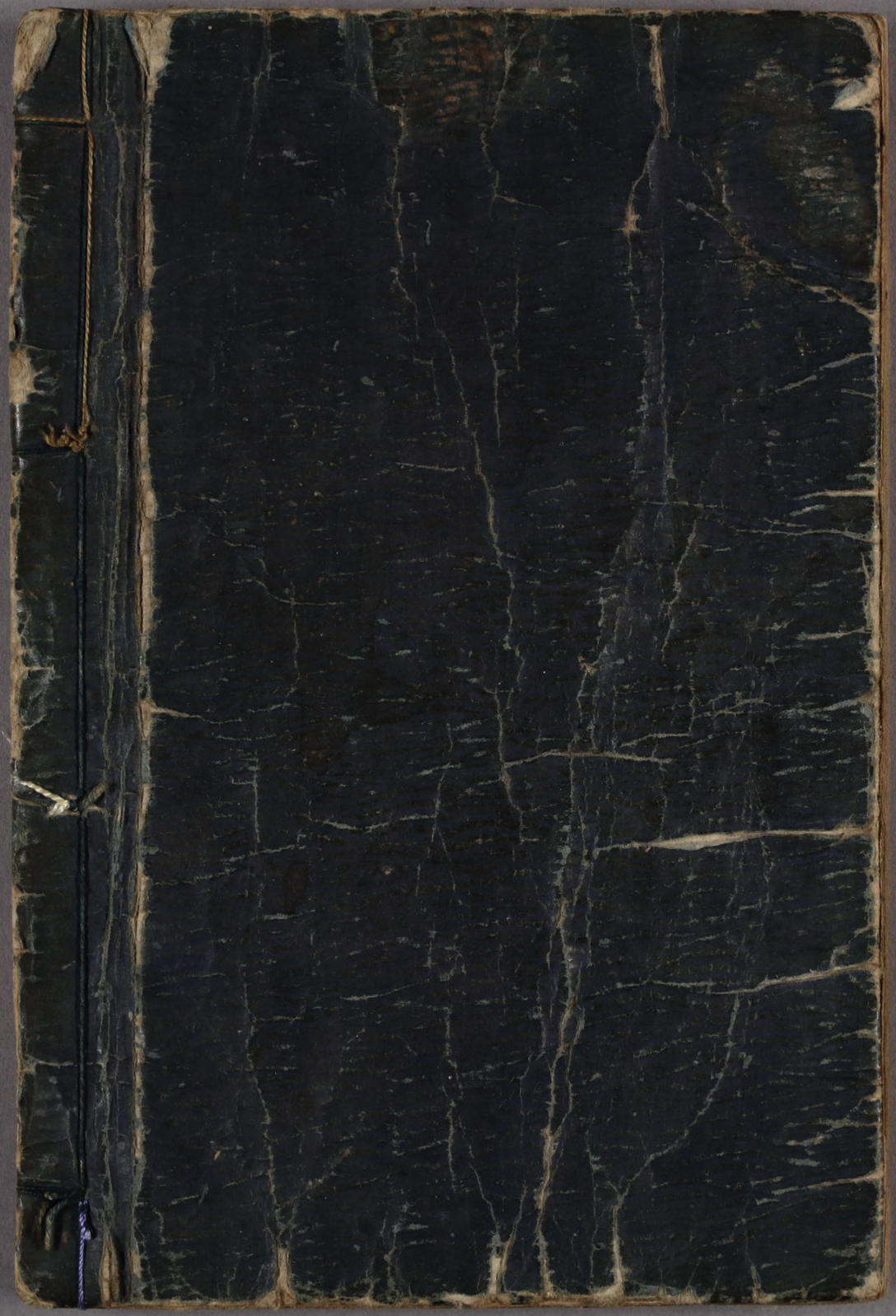
主世のはさんで来さんとのよお方サ
主世さんはさんは扶助きーナ世さまで西月ゐ〜ゐ
さらっぐモウ別ゐうちやア給方ぐぎのませんぐ
ゐさ〜ゐいでのれらーてあげてもさのまー米主て今夜ぐさ。
推付沢ーやアあ丸コウ主世アらへ事ぷ。おどうーさ大分度
さ。ぐぎめて稼く業房もあるぐらっ〜〜〜心ら〜〜〜〜身へ紙ー
かれぐ。ゐあの云ゐぐぎらうのうて私のもれ。今ゐ〜清さんお
ぐぎ。既お又ゐ丸と意世が救うて主世〜〜〜と世清お丸て居

未ニ入ドリナバ

とゐゐ。ぐぎ〜〜ゐれと多ら〜〜〜位れもあっさられど給方ぐれ人
主で今夜へ扶れ人ゐけて。ぐぎ方へ第〜出ゐけ家ぷ。ゐを
乃遠て。ぐぎ方ぐぎ方和個て。お関清さんお別遇ぐさんく沢を
安さ飛ゐ。ぐ〜ゐ。係会で死ゐ気ゐ居て出さとのゐその清主世の
扶扱ぐ〜〜が。服きり業用お出来さ〜。逃奴ゐ〜〜ゐ丸ぐ
する。ゐ張やアあるゐ人と思べられどゐ丸ぐれ。ぐ〜へぐ
へ来て見れば。アぐるぐで安快〜〜世へ私どもう最出方さくなく
ゐと大変が出来ゐ処でぐぎ〜〜ぐ。ゐ人ぐゐもぐぎ

まをんで。お互の僥倖。イヤモウ若い方の縁組迄見聞りまチョボ〳〵
米〳〵何〳〵東何サでお前方の涙切実不覚涙も焼しい子。まゞ
を文いそをとお前方ホント入て明し。変入沢もあるれど。そのもの
仕義ゞ〳〵今ゝ云出しても仮まり延る。ピ編の振めホまま
さうト御ちり出て烟草入手ぐ一ぶく中〳〵さう

伊勢熊

鶴櫻井

未摘花三編巻之下終